

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」5月号 (通巻第24号)

2009年4月28日発行

[発行人] 赤塚祐一郎

[編集人] 大森美知子

[発行所] 株式会社ラジオカフェ

東京都新宿区新宿 1-6-5 シガラキビル 6F

Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281

http://www.radiodays.jp

5

May Edition

2009, vol.24

Free of charge

この人の声が聴きたい◎5月

加藤和彦さん (ミュージシャン)

ロマンティックな酔っ払いはどこへ行ったか

「ロマンティックって人間の感情の中で一番美しいものなんだよね」と、加藤和彦さんがインタビューで語っていたことがある。聞き手は、北中正和さんで、一九八〇年代初頭だったと思う。

加藤さんは、その頃、『パパ・ヘミングウェイ』(一九七九)、『うたかたのオペラ』(一九八〇)、『ベル・エキセントリック』(一九八二)などのロマンティックでちよつとレトロかつスノッブなソウルバムを安井かずみさんとつくっていた。七〇年代のカウンターカルチャーがポストモダンに転換していく、その過渡期の頃だった。ロマンティックというのは、では、何か？

そのおおもとはラテン語的に対するロマンス語的であって、ローマ時代の支配層ではない、庶民の言葉で語られた物語に端を発する。乱暴なことを言えば、プラトニックではない、「身も心も」がロマンティックの本質にある。

加藤さんの初期のナンバーには「ぼくのそばにおいでよ」(原題「Come to my bedside」)もあるが、そもそも、フォークル時代の大ヒット曲「帰ってきたヨッパライ」(一九六七)自体が、うまい酒ときれいなねえちゃんへの惑溺による天国追放という、きわめてロマンティックな主題を歌っている。

六〇年代から七〇年代にかけてのカウンターカルチャーの本質には、政治的な反体制だけでなく、アタマに偏重した知的啓蒙主義への対抗もあった。いわば、カラダとココロの反逆。私には、加藤和彦というミュージシャンが、音楽や演奏の装いを変えながら、この一点においては一度も転向したことがないように見える。



彼の柔らかい鼻濁音のボーカルは、ラブソングを歌っても、国境の河を歌っても、その芯のところに何かなみなみならぬ決心が潜んでいる。瘦身長軀の外形とは別の意味のカラダとココロの大きさが、この人の長い音楽家生活を支えてきたことはまちがいないだろう。

加藤さんは、少し前から坂崎幸之助さんと組んで、「和幸」というユニットを結成、最近『ひつびいんど』というアルバムを発表した。ここには、「タイからバクチ」「ナスなんです」「あたし元気になれ」なんていう、どこかで聞いたような曲名が並んでいて、全篇が七〇年代ミュージックへの上質なトリビュートになっている。

アルバムタイトルと同名の「ひつびいんど」は、加藤流の七〇年代挽歌だ。髪を長くするのが嬉しくて、座り込んだり、叩かれたりしながら、そんな毎日が不思議でうきうきしていた時代、その「エンド」を歌っている。これはノスタルジーではなくて、舌に苦い問いかけである。ヒッピーエンドを体験した世代に対する自由の感覚やロマンティックな感情のリマインドメッセージである。

すると、サディステイック・ミカ・バンドの「タイムマシンにお願い」も、実はそんなメッセージを送っているように聞こえてくる。何かが変わる そんな時代が好きなら、そのスイッチを少し昔に回せば、無邪気な夢の

はずむ素敵な時代へ行ける……
団塊世代は、再び、ロマンティックな直接行動に打って出るべきなのである。

(ラジオデイズ・プロデューサー 菊地史彦)

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(登録無料)になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてが試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りませ!

<http://www.radiodays.jp>

〈対話・放談〉

人気メルマガでおなじみ「田中宇の国際ニュース解説」のエッセンスを毎月本人の肉声でお届けする『世界はこう読め!』、人気コラムニスト小田嶋隆氏が世相を斬る『ラジオカルトック』、大貫妙子さんと加藤和彦さんなど、ミュージシャンに話を伺う『Music Talk』が好評。現在、第一回を無料ダウンロード中です。さらに、慶應丸の内センターパス(慶應MCC)が開催している『文学』のなかから、各分野の第一線で活躍する研究者・経営者・文化人・ジャーナリスト等による講演を厳選してお届けしています。

〈文芸〉

作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた『声のエッセイ』コレクションが評判。また、『声の詩集』シリーズからは、女優鳥丸せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする『詩人の愛』I・IIをお届け中。女優有馬稲子さん朗読の『水仙』も登場。さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三師朗読による江戸弁で聞く落語調『ゴリ』『外套』『鼻』も発売。詩人の小池昌代さんのコラム『言問い小路』も好評連載中。

〈話芸〉

ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源二百六十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家業籠中に現代に演じきる噺家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に筆を削る噺家たち。ライブ音源だけに一期一会の噺に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチャオシの噺家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてください。まずは、試聴ボタンを。

オリンパスシンクする寄席

〔日時〕5月18日(月)午後6時45分開演(午後6時15分開場)
〔場所〕お江戸日本橋亭

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……。それを自家菜籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。毎回二人の演者が二席ずつ競演します！

三遊亭遊雀

(さんゆうてい・ゆうすけ)

平成一三年、真打昇進。一八年、三遊亭小遊二門となり独特の浮遊感と彫りの深い演じ手として活躍中。古典ネタを得意とする折り紙つきの実力派。一八年度、国立演芸場主催「花形演芸大賞」金賞を受賞、翌年大賞受賞。自他ともに認める鉄道ファン。



鈴々舎馬るゝ

(れいれいしゃ・まるる)

鈴々舎馬風門下。平成一八年、二ツ目昇進。古典、新作、三味線漫談など型にとられない自由な芸風で注目されている若手のひとり。得意とする改さん落語「ハングル寿限無」では、初めて落語を聴く人をも爆笑の渦に。趣味はギター、格闘技、泡盛。



明烏い話

連載第25回

本田久作



四、五年に一度くらいのペースで立川談志の『現代落語論』を読み返している。初めて読んだのが中学生の頃だから、おそらくこれまでに十回近く読んだことになるが、感想はいつも同じだ。何度繰り返して読んでも、私はこの本が理解できないのである。といって、内容が難解だというのではない。今なお『現代落語論』を聖書のように崇める人が存在することが私には理解できないのだ。

『現代落語論』の刊行は一九六五年である。当時、これだけのことを書けたのは日本で談志ただ一人であった。それほど談志は斬新だったし、この本で提示されている問題のいくつかが今もなお解決されていないことだけでも、新しさは常に淘汰されて古びていくものだし、また古くならなければならぬ。でなければ、談志以外の者がいつまでも古さの中に安住していることがばれてしまう。

『現代落語論』が上梓されて私がそれを読むまでの間に十年の時間が経っていた。その十年の間にこの本の中で展開している談志イズムは、相当な影響力をもって落語に対する人々の意識を変えていき、そこから生まれた独特の危機感は落語ファンの間に見事なくらいに広まっていた。だから、初めて『現代落

語論』を読んだ時、私は何の感動も覚えなかったのである。それどころかこの本を褒めやす人たちはたちの悪いおべっか使いぐらいにしか思えなかった。何故ならそこに書いてあるのはその頃の常識でしかなく、目新しい記述、人を驚かす言葉など何一つなかったからである。それは私が聡明だったからではなく、当時すでに談志イズムがそこまで世間に蔓延していたということだ。独自の考えを持たない私は世間の意見を鵜呑みにしていたのである。「落語は能狂言のようになるだろう」と今さら言われても、そんなことはとつくに知ってるよ、だ。

つまりはこうだ。まず談志が、地球は太陽の周りを回っている、と言いだした。最初のうちは誰も談志の言葉など信じなかったが、次第にその説は広まり、十年後には誰も談志の発見を疑わなくなっていた。私が地動説を唱えた本を読んだのはちょうどその頃のことである。あまりにも多くの人がその本の革新性を褒め称えるので手を出したのだ。だが、生憎と私には何の感銘も与えなかった。何故なら私は地球が太陽のまわりを回っていることなどその時すでに知っていたからである。知識というものは重要なものであればあるほど原典などすつ飛ばして人々の間に伝わる。『資本論』を読まなくても革命は起きるのだ。

今なお『現代落語論』を読んで感動する人たちがいる。四十年以上前から談志が言い続けていることに今さらながらに感動するのは、その四十年の昔から今に至るまで談志の高座に一度も触れたことがないからだろう。好意的にとらえるならそうとしか考えられない。何故なら談志の高座こそ『現代落語論』だからだ。『現代落語論』など読まなくとも談志の高座を聞けば、『現代落語論』は読んだこ

とになる。これは極論でも何でも無い。ならば今さら『現代落語論』を読む必要すらないだろう。

しかし、それでも今なお『現代落語論』を聖書のように崇める人はいて、彼らは長年の談志ファンだと自称して恥じるどころがない。だから私はわからなくなってしまうのだ。どうして今さらあまりにも多くの人たちが『現代落語論』を評価するのか。

●ほんだ・まうさく

一九六〇年大阪府生、落語作家。二〇〇一年の「仏の遊」が国立演芸場台本募集佳作受賞以来、落語、漫才など新作台本関係の賞を毎年総ナメの業界巨匠の新進作家。主左受賞作「玉手箱」(国立演芸場台本募集優秀作)、「唄の葬式」(按摩の夢)、「幽霊変身」(いずれも落語協会優秀賞)など

私の讃犬ばなし 貳拾四

春風亭小柳枝

壱 『高砂屋』

昭和四十年入門した頃の頃、最初の師匠・四代目春風亭柳好に初めて稽古をつけてもらったが、まだ若き日の古今亭志ん朝師匠の録音テープ。初めて聴いたこの唄が深く印象に残りました。もちろん、いまはまだ手元にだじじに持っています。この唄は、唄家になつてから三笑亭夢楽師匠に教えていただき、持ちネタのひとつになっております。

貳 『あくび指南』

まだ唄家になる前、ようやく買ったテープレコーダに付いていたハガキを応募して貰ったのが、まだ若き日の古今亭志ん朝師匠の録音テープ。初めて聴いたこの唄が深く印象に残りました。もちろん、いまはまだ手元にだじじに持っています。この唄は、唄家になつてから三笑亭夢楽師匠に教えていただき、持ちネタのひとつになっております。

参 『景清』

まだ新劇かぶれだった二十歳のとき、母に誘われて末廣亭二階の一番前の席で聞いたのが、トリだった八代目桂文楽師匠のこの唄。聞き終わったとき「落語は芸術だ！」と感じ入りました。あれから四十三年、昨年柳亭左楽師匠に教わり、夏の二門会で初めて高座にかけて、感無量でした。

行こみぢが

女流二ツ目の修行日乗②

柳亭こみち



大変ショックなことが起きた。「小三治独演会」でのことだ。

今も昔も私は「小三治ファン」。燕路もしかり。師匠の口癖は「一門のトップに小三治がいる俺達は幸せだ」。柳家の芸の真骨頂、小三治。まくらも魅力の一つで、ゆっくりと紡ぎ出す言葉とエピソードは味わい深く興味深く、何時間でも聴いていたくなる。

先日、とある「小三治独演会」で、そのまぐらの最中にお客様からかけ声がかかった。「あのー……、まあ……」とたつぷり間をとって話していたところへ「早くー」と。これは小三治の会。時間が限られた寄席でも他の噺家との会でもない。会唯一のメインに對して「早くー！」。

お客様の方に添うことが我々の仕事。でもこの発言の主の心に、私は共感できない。落語はテレビのお笑いとは違う。スピード感のある舞台を望むなら他の芸人を見ればよい。ゆったり噺を味わう心がないのは悲しく貧しいことだ。小三治独演会に限ってそんなお客様がいようとは。愕然とした。

その方に大師匠はこう言った。「急いだってしょうがないの。テレビ番組は次から次へと展開して、ときには字幕も出せばと変わるけど、落語はそうじゃないの。ゆっくりいきましょう。」

小三治の芸は本物だからこそテレビ番組とは大きな開きがある。時代が変わっても変わってはいけない心がある。我々はそれを受け継いでいかなければなら

いと、強く感じた。

※大師匠：師匠の師匠のこと

●りゅうていこみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味は長門。特技は日本舞踊、吾妻流名取（吾妻春美）。落語協会野球部チームR所属。



味な脇役・話芸のきまり文句

連載第24回

碁・将棋



松井高志

落語や講談ではしばしば登場人物が碁・将棋に興ずる。しかも大抵勝負に夢中になるため、これが間違いの元になることがよくある。碁好きの人々が起こす滑稽を扱った噺（しばしば「碁敵は憎さも憎し懐かし」の引用で始まる）もあるし、そうでなくても、碁・将棋から大小の事件が発生する。

碁将棋に凝るご親の死に目にあえない

という諺が落語の「宮戸川」や「碁どろ」には出てくるが、これは、「碁や将棋に凝ると大事な用もほったらかすようになること」とのたとえ（「故事俗信ことわざ大辞典」小

学館より）。「文七元結」の手代文七も、碁に夢中になったため、小梅の水戸家を持ち帰るべき金をうっかり忘れてくる（それを彼は掏摸に盗られたものと勘違いして身投げを図る）。

また、講談「慶安太平記」になると、江戸焼討ちの前夜、奥村八郎右衛門と丸橋忠弥（異様な負けず嫌い）が碁の「待った」「待てぬ」から諍いとなり（はたから見れば実につまらないきつかけだ）、丸橋が奥村の額に傷をつけたことから、遂に幕府転覆の陰謀が露顕してしまうことになる。極端に言えば碁のために江戸幕府が絶体絶命の危機を脱したのである。このトラブルの場面に

下手の考え休むに似たり

も、「碁将棋にまつわる文句」といってよさそうだ。両方ともに縁遠い筆者などは碁将棋とひとくくりに片付けしようのだが、落語「浮世床」には、

碁は牛のごっこ、将棋は早馬のごっこし

という、二種のゲームの相違をいう諺が出てくる。

たしかに、たとえば時代劇などで殿さまと家老が密談しながらじつくり打っているのは碁であり、あれが将棋ではどうも雰囲気が出ないように思える。

●まい・たかし

一九六〇年愛知県生、月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に「人生に効く！ 話芸のきまり文句」平凡社新書、「テンドク【難読漢字自習帳】（パズリコ）江戸に学ぶビジネスの極意」アスペクトなど。「話芸きまり文句」辞典」サイトは<http://magellan.coology.rinky.com/>

「声」と「語」をタマフロードー

今が旬の音声コンテンツ満載

<http://www.radiodays.jp>

歯に衣着せぬ発言で世相を斬る痛快トーク

●「田中宇の世界はこう読め！」

●「小田嶋隆のグラフィカルトーク」

ミュージシャン・ロングインタビュ

●「Music Talk 大貫妙子の世界」

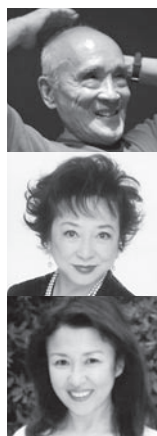


温もりと味のある声のエッセイ／新鮮な詩の物語り

●詩人の心の原風景（谷川俊太郎）

●「水仙」瀬戸内寂聴（朗読・有馬稲子）

●詩人の愛 金子みすゞ、中原中也、村山槐多ほか（烏丸せつ／正津勉）



本邦初！世界初！江戸弁で聴く落語「ゴロリの魅力」

●「外套」（I・III）

入船亭扇辰

●「鼻」（I・II）

柳家三三



面白くて物凄、当世落語家の噺がいっぱい
三遊亭円丈、昔昔亭桃太郎、五街道雲助、古今亭志ん五、柳家小ゑん、瀧川鯉昇、柳家喜多八、柳亭市馬、桂平治、柳家喬太郎、三遊亭白鳥、三遊亭遊彦、入船亭扇辰、林家彦いち、古今亭菊之丞……etc.

ラジオデイズサイトにようこそ！

※ご購入や無料ダウンロードには会員登録（無料）が必要です。



オリンピック寄席 五街道雲助独演会

【会場】お江戸日本橋亭「吉越」2800円（前売2500円）
【時間】午後7時開演（午後6時半開場）
●6月17日◎

五街道雲助・ダスト 鈴々舎わか馬

※予約申込受付中。ラジオデイズ URL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話 011-3341-1130より、先着順です。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。
お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、伊藤博、大森美知子が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信しています。どうぞ真夜中の語らいに耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

インターFM 毎週日曜日の深夜23時から23時半まで。

今後の放送予定（深夜のお客様）

- 5月3日 西江雅之（文化人類学者）
- 10日 三遊亭円丈（落語家）
- 17日 桃井和馬（写真家）
- 24日 神田愛山（講談師）
- 31日 小田嶋隆（コラムニスト）

「声」と「語り」をダウンロード!

今が旬の音声コンテンツ満載
<http://www.radiodays.jp>

今最もブッキング困難な役者を揃えた特別対談。絶妙な話芸と目から鱗の文化対談をお届けします。

◎戦後落語論

新作落語の旗手、そして教祖的存在である三遊亭円丈に、新進の落語作家本田久作がからむ。落語ファン待望の新作落語黎明期の真相話が炸裂。



三遊亭円丈

本田久作

◎戦後詩人論

戦後作家の中心的存在であり鋭利な批評家でもある高橋源一郎が、生粋の詩人にして川端康成賞の小説家でもある小池昌代と現代詩について話し合う。



高橋源一郎

小池昌代

◎戦後マンガ家論

脳生理学者であり京都漫画ミュージアム館長でもある養老孟司と小林秀雄賞受賞の現代思想家内田樹。マンガに一家言あるこのふたりが存分に語り合う。



養老孟司

内田樹

そのほか、面白くて物凄、朗読や落語がいっぱいです。ラジオデイズサイトによるこそ！
※ご購入や無料ダウンロードには会員登録（無料）が必要です。

卯月の落語会

今月の第二十三回オリンピックシンク寄席

（四月十五日）は、瀧川鯉昇独演会。開口一番は、春風亭ぼっぼさんの「みそ豆」から。カワユイ小僧さんが聴き得でした。さて、いきなりの真打ち登場、鯉昇師匠は「長屋の花見」でご機嫌を伺います。貧乏噺では定評のある師匠、長屋の面々の悲喜こもごもを実に丹念に描いていました。存在そのものがオモシロイ師匠、今年の聴き納めの長屋の花見に相応しい仕上がり。続いて登場は、本日のゲスト春風亭一之輔さん。風の向くまま気の向くまま「あくび指南」で爆笑をとりました。おつな年増の稽古屋ができた、友達を誘ってあくびを習いに出かける男。師匠が亭主だと判明してがっかりしたはずが……。あくび指南という噺が、こんなに笑えるものになると思ってもみななかった脱帽もの。しっかりとした古典に現代感覚を持ち込み大成功！ 仲入り後のトリはもちろん鯉昇師匠。ネタは「御神酒徳利」。お店の大掃除、

物忘れの激しい番頭が不用心に放置されていた家宝の御神酒徳利を、水瓶にちよつと隠したのを忘れて大騒ぎに。思い出したものの今更言い出せず、そろばん占いで見つけたことにする。ちょうど来ていた本店のお客がこれを見て主人の娘の病の原因を突き止めようと、大金の謝礼を餌に占いを頼む。嘘っぱちの占いのはずが、何事もいのように運んで事件を円満解決していく、はらはらドキドキの爆笑巨編。なかなか聴けないフルバージョンを聴けたお客様は天下の幸せ者です。いや、落語って、ほんとりにオモシロイ！

（ラジオデイズ寺和尚）



ichinosuke

risyo

「オリンピックシンク寄席」携帯用特別コンテンツ

シンク寄席特別コンテンツでは、シンク寄席やラジオデイズ落語会にご出演いただいた演者さんの情報や音源、最新のラジオデイズイベント情報が携帯電話からお楽しみいただけます。



バーコードで簡単アクセス!

左のバーコードを携帯のカメラで読み込み、無料画像認識アプリ「sync ★R」（シンク）をダウンロード。

もしくは

空メールを送信してアクセス!

a@gwmj.jp

ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。

次にアプリから「sync ★R」（シンク）を起動、月刊ラジオデイズ各号の1ページ目『この人の声が聴きたい』の丸抜き写真、2、3ページの落語会情報内にある噺家さんプロフィール写真を撮影して保存・送信すれば OK。

※各写真の全体が入るように、ピントの合うところまで離して撮るのがスムーズにダウンロードするコツです。

シンク（Sync ★R）とは？

オリンピック株式会社の開発による先進の画像認識技術を用いたカメラ付携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

初夏を思わせる心地よい陽気が続き、新緑きらめく新宿御苑には、連日多くの人々が訪れ賑やかになっていきます。

さて、毎回ご好評いただいているラジオ番組「ラジオの街で逢いましょう」の番外編「プラス1」が新登場。ラジオデイズのウェブサイトに内だけで公開されるコンテンツです。ラジオでお伝えしきれなかった興味深い話題を掘り下げてたっぷりお届けしていきます。

